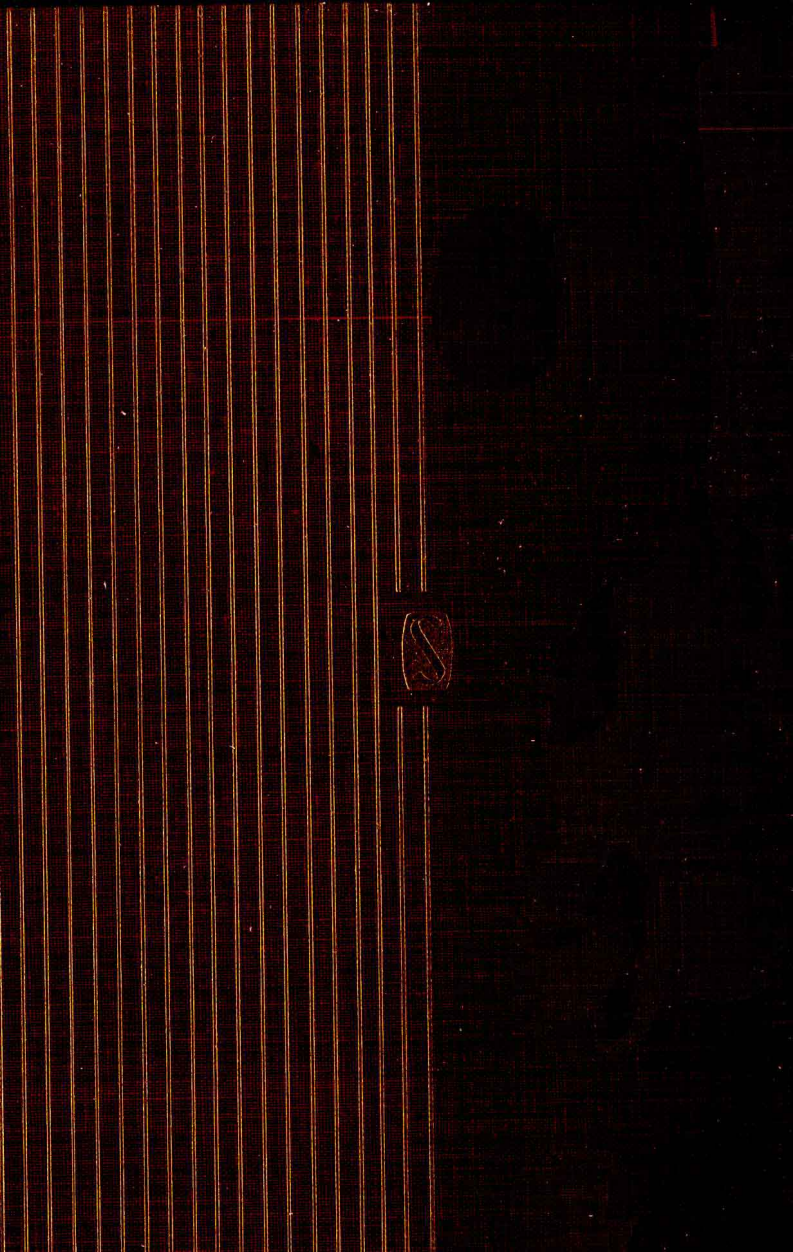

41

世界文学全集

マノン・レスコー　プレヴォ／青柳瑞穂訳
カルメン　メリメ／堀口大學訳
椿姫　デュマ・フィス／新庄嘉章訳

新潮社

世界文学全集　41

マノン・レスコー／カルメン／椿姫

プレヴォ／メリメ／デュマ・フィス

訳者　青柳瑞穂／堀口大學／新庄嘉章

発行／1971年6月30日　7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111　振替東京4-808　郵便番号162

印刷所／大日本印刷株式会社　製本所／大進堂製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

騎士グリュウとマノン・レスコーの物語 …… 3
カルメン …… 177
椿姫 …… 249
プレヴォ、メリメ、デュマ・フィス …… 489

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

騎士グリュウと
マノン・レスコーの物語

Histoire du chevalier Des Grieux et de Manon Lescaut

by

Antoine François Prévost

作者の言葉

私は『ある貴人の回想録』の中に、『騎士グリュウの物語』を入れることにしたが、そこにはなんらの必然的な関係もないのだから、読者はこれを切りはなして読んだほうがかえって納得がいくのではないかと思われる。この話自体が相当に長いので、そうでもしないと、これまで私のつづけてきた私自身の身のうえばなしの筋みちを中断してしまうおそれがある。正直なところ、私は厳密な意味での作家の資格を要求しようなどとは毛頭思わないが、説話というものは、それを重くるしくし、ぎごちなくさせるさまざまの副事件から解放される必要のあることを、私といえども知らなくはない。ここにホラチウスの訓言を引用するならば、

先に言うべきことを先に言い、
他は機会あるまで言わざること。

これほど単純な真理を証明するのに、こんないかめしい権威まで引き合いに出す必要などなかろう。なぜなら、この種の原則の本源をなすのは良識だからだ。

もしも読者が、私の身のうえばなしの中に何か楽しいもの、何か興味のあるものを見いだしたとしたら、ここに加える一編の物語にもやはり満足されるであろうことをお約束する。人はグリュウ君の行状に、燃えさかる情火の恐るべき実例を見るであろう。私は恋ゆえに盲目となった一青年を描こうとしているものである。彼は幸福であることを拒絶して、終局は、悲境にみずから飛び込もうとする。かがやかしい未来を約束している、あらゆる才質をかねそなえながら、みずから好んで裏街道をごろついて、運命と自然がもたらす有利な条件のごときもことごとく棒にふってしまう。自分の不幸が目に見えているのに、避けようともしない。もとより、そうした不幸を身をもって感じもし、また、その蹂躙にまかされてもいるのだが、親しい人たちから不幸払いの方法を絶えずさずかりながら、それをいっこうに利用しようともしない。要するに、有徳であると同時に不徳であり、良く思考しながら、悪しく行動するという、どっちつかずの性格なのだ。以

上が、私のこれからお目にかけようとする絵巻の背景をなすものである。良識ある人びとなら、この種の作品をもって、必ずしもあらずもがなの作品とは思うまい。楽しい読書という喜び以外にも、品性をみがくことのできるようなところも少なからず見いだされるだろうと信ずる。そして、私に言わせれば、公衆を楽しませつつ同時に教育するのは、彼らに大きな奉仕をすることになるのである。

道徳律というものを考えてみるに、それは尊重されていながら、しかも無視されているものであることを知って、われわれは今さらのように驚かされること毎度である。われわれは観念的には良きもの、完全なものを、つねに楽しみながら、いざ実行となると、それはいつも遠いものになってしまうのだから、人間の心は不思議なもので、その原因はどこにあるものやら。たとえば、ある程度の英知と洗練をそなえた人びとが、自分たちの会話の、あるいは、自分たちの孤独な夢想の、最も一般的な題目はなんであるかを考えてみるならば、いずれもある道徳的な考察に向けられている場合が多いのに彼らは容易に気づくことであろう。そうした教養人の人生で最も楽しい時間は、孤独な夢想にふけっているときか、さもなくば、親しい友とうちとけて語り合うときであろう。美徳のもつ魅力、友情の美しさ、幸福への道、その道から遠ざかろうとする人間の弱さ、また、その弱さを救うべき方法、などがその話題であることは言うまでもあるまい。ホラチウスやボアローのごときは、このような談話を最も美しいものの一つとして取りあげ、それをもって人生の楽しい姿を描き出そうとしたのである。ところがどうしたというのだろう、こんな談話も束の間、人びとが高い思索からたわいなく落下して、たちまち、人間共通の水準になりさがってしまうとは？　この疑問を解くために、いま私があげようとする理由が、もしわれわれの思想と行動のこの矛盾を十分に説明しないとすれば、もとより私の不明のせいではあるが、私に言わせれば、道徳律というのは、いずれも、ぼんやりした、一般的な原則にすぎないのだから、それを人間の習癖や行為の細部にまで一々適用しようとするのがはじめから無理なはなしなのである。例を引いてみよう。生まれながらに善良な魂を持った人びとは、温和と人情を好ましい美徳だと感じて、それを実行してみたいという気持ちになる。ところが、実行となるとどうだ

ろう？　一時見合わせということが多いのだ。今が果たして実行の好機だろうか？　取るべき手段は分ってるのだろうか？　目標に見あやまりはないだろうか？　などなどと考えればおのずと故障が出て、つい引っ込み思案になってしまう。親切であり、寛大でありたいのはやまやまでも、だまされるのが心配である。あまりに優しくて、感じやすかったりすると、弱気な人間なら、笑われそうな気がする。要するに、義務などというのは、人情とか親切とかいう一般的概念の中に、あまりにもあいまいな方法で閉じこめられているものだが、その義務を果たしすぎたか、果たしすぎなかったかと心配するわけなのである。この不安のうちにあって、われわれの心のゆくえを合理的に決定し得るものは、経験か、さもなければ、実例であろう。ところで、経験というのは、だれにでも自由に与えられる特権ではない。それは人が偶然におかれた種々の境遇によるものである。だから、たいていの人たちにとって、徳性を行動にかえる場合、原則としては実例のほかはないということになる。ここに示そうとするような作品がきわめて有用でありうるのも、まさにこの種の読者にとってである。もちろん、それが誠実と良識をそなえた人の手で書かれた場合でなければならないのはいうまでもない。ここに述べられるいかなる事実も、知識の一段階となり、経験をおぎなう学習となろう。いかなる事件とて、おのれを映すべき鑑となろう。ただ人おのおのがおのれの境遇に応じてこの鑑を使い分けさえすればいいのである。作品全体としては道徳上の論文ではあるが、それがこころよい手法で実習にうつされたまでである。

やかましい読者は、私がこの年齢になって、波乱万丈の恋物語などを書こうとして筆を執るのを憤慨するかも知れない。しかし、いま述べてきた考察が根拠あるものとすれば、この考察が私を正当化してくれるはずである。もしまちがっているとすれば、私の謬見が、少なくとも、私の弁解にはなろう。

第一部

この物語を語るためには、私がはじめて騎士グリュウに出会った、私の生涯の一時期まで読者をさかのぼらせなければなるまい。それは私がスペインへ出発する五、六カ月ばかり前のことだった。私は自分の隠遁所を出るようなことはめったになかったけれど、たまには娘のことも思ってやらなければと、小旅行くらいは時たま試みもしたが、それもできるだけ短期間にしていた。

それはある日のこと、ルーアンからの帰りであった。——というのは、娘には、私の母方の祖父から譲りうけた土地があったが、その相続の件で、請願のため、ノルマンジー高等法院へ行くことを娘から頼まれたからだった。道をエヴルーにとって、最初の夜はそこで泊まり、翌日は二十二、三キロ先のパシーで昼食をとることにした。ところで、この町にはいると、町中が大騒ぎなので、びっくりした。町の人たちは家を飛び出すと、群がりながら、ある下等な宿屋の戸口めがけて押し寄せる。見ればそこには二台の幌馬車があった。馬はまだつながれたままだし、おまけに、疲労と暑さで湯気を立てているところをみると、これら二台の馬車は着いて間もないことが分る。この騒ぎのわけを知ろうと、私もしばらく足をとめたものの、この野次馬連中からは説明など引き出せそうもなかった。私の問いなどに耳をかすどころか、押し合い、へし合い、ごった返しながら、相かわらず宿屋めがけて押しよせる。やっと、ひとりの巡査が戸口に現われた。負い皮をつけ、火縄銃を肩にかけている。私はその男を手招きして、この騒ぎのわけをたずねた。

「なあに、たいしたことでもありませんわい」彼は言った。「白首一ダースをさ、ル・アーヴル・ド・グラースまで運んでって、船に積みこんで、それからアメリカ行きというわけさ。かわいいのもいくらかいるんで、土百姓どもが興奮しているのも、てっきりこれでしょうなあ」

この説明を聞いただけで私は通りすぎたかも知れなかったのに、たまたま宿屋から飛び出てきたひとりの老婆の嘆声に思わず足をとめてしまった。老婆は、あ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

あ、むごいことです。かわいそうです。見てはいられません、と両手を合わせながら、叫んでいるのだ。

「どうしたというのかね？」私は言った。

「ああ！　だんなさま」老婆は答えた。「はいって、ごらんになるがいい、あれを見て、胸がつぶれずにいられましょうか」

私も好奇心にかられて馬をおり、それを馬丁にあずけてから、人ごみをかき分けかき分け、やっとはいってみると、なるほど、相当に感動的なものが目にはいったのである。十二人ほどの売笑婦が、六人ずつ、胴のあたりで鎖のじゅずつなぎにされていたが、なかにひとり、容姿といい、顔だちといい、娼婦風情には不似合いのような、もしこれを別の場所でみたならば、お嬢さまにも思われそうな女がいた。彼女の悲嘆も、下着や衣服のよごれも、彼女を醜く見せるどころか、かえって尊敬とあわれみをそそるほどだった。そのくせ、見物人たちの目から顔をそむけるために、つながれた鎖がつづくかぎり、からだをよじ曲げようとしていた。身をかくそうとするその努力がいかにも自然なのをみると、それはつつしみ深い心からきているものらしかった。この哀れな一隊について来た六人の看守も部屋にいたので、私は首領株を別室に呼んでから、この美しい娘の身のうえについて、二、三の説明を求めたが、ごく普通の説明しか得られなかった。

「あの女はオピタル（訳注　または、オピタル・ジェネラルとも呼ばれる。一六五六年にパリに創立され、主として、娼婦や不良少女などを監禁した）から引っぱり出されて来たまでのことで」彼は言った。「もちろん、警視総監の命令でね。あの女が、何かよいことをしたんで、あそこへぶち込まれたとは思えませんな。わしも道々なんべんか声をかけてみたが、よっぽど強情とみえて、うんともすんとも言いませんわい。わしにしたって、あの女だけをいたわってやれと命令をうけているわけじゃないが、それでも、少しはめんどうをみてやったつもりですがな。あれでもほかの仲間よりはいくらかましのように見えますんで。そら、あそこに若い男がいましょう」巡査はつけ加えた。「あの女がどうして落ちぶれたか知りたいなら、わしなんかより、あの男に聞くほうが早道でしょう。なにしろ、パリからつききりですからな。それも泣きつづけでね。あれはきっと兄貴か、色男にちがいありませんぜ」

部屋のすみのほうを振り向いてみたら、その青年というのがそこにすわっていた。何か深い物思いに沈ん

でいるらしかった。かつて私はこれほどまでにはげしい苦痛の色を見たことはなかった。身なりこそごく粗末ではあったが、家柄もよく、教育も受けた男であることは一見して分った。私は彼のほうに歩みよった。彼も立ち上がったが、その目、その顔、また、その動作の一つ一つに、洗練された、高貴なものを発見したので、自然と私もこの男に好意を感ずるようになっていた。

「おじゃましてすみませんが」と、私も彼のかたわらにすわりながら言った。「あの美しい方について知りたいのですけど、私の好奇心を満たしていただけないものでしょうか？　どう見たって、こんなお気の毒な目にあわせてはいけない方のように思われますので」

これに対する青年の答えは至極率直なもので、自分自身のことを知ってもらわなければ彼女の何者かを教えることはできない、しかし、彼自身は仕方ない理由から人に知られずにいたい、というのだった。

「でも、あの下等なやつらが感づいているくらいのことならお話しできます」青年は巡査たちを指さしながら、つづけて言った。「それは私が、あまりにも彼女を熱烈に愛しているために、私はあらゆる男の中で一番不幸な人間になったということです。私はパリで彼女を釈放させるためにあらゆる手段を講じましたが、嘆願も、策動も、暴力もむだでした。私はたとえ彼女が世界の果てまで行こうとも、そのあとを追って行く決心をしたのです。彼女といっしょに船にも乗ります。アメリカにも渡ります。ただ、実に残酷にも、あの卑劣漢どもが」と、彼は巡査たちのことを言った。「私を彼女のそばへやるまいとしているのです。私の計画は、パリから十二、三キロ離れたところで彼らを白昼公然と襲撃することだったのです。私は相当の金を支払って、助太刀してくれるという四人の男を仲間に入れました。ところがいざとなると、その卑劣なやつらは、私ひとりを敵に残したまま、自分たちは金もろとも逃げ出してしまったんです。暴力では成功できないと知って、私は武器を捨てました。私は巡査どもに報酬を払うことにして、せめて同行することを大目にみてもらいたいと申し出ました。もうけ仕事だと聞いて、彼らも承知せずにはいませんでした。彼らは私に恋人と口をきかせるたびに、支払いを要求しました。いくらもたたないうちに、私の財布はからっぽになってしまいました。ところが、こうして、一文なしにな

ると、私が彼女のほうへ一歩ふみ出しても、彼らは私を乱暴に突きとばすという残酷な仕打ちにうってかわりました。それでも私が彼らの威しを無視して、そばへ行こうものなら、たちまち、なまいきにも鉄砲の先を突きつけずにはおきません、彼らの欲ばりを満たすためには、これまで私を乗っけてくれていた馬を、立派な馬とはいえませんが、ここで売って、これから先は歩くよりほかはありますまい」

この話を彼はかなり落ち着いてしたようだったが、それでも、語りおえようとして数滴の涙を落とした。この恋物語ほど感動的で、異様に思われたためしはなかった。

「ごむりまでして」と私は言った。「この事件の秘密を打ちあけてくれとは申しますまい。しかし、何か私でできることがあったら、よろこんで一肌ぬぐつもりですが」

「ああ！」と彼は語をついだ。「私の前途にはなんの希望もありません。ただ残酷な運命に従うだけです。私はアメリカへ行きます。アメリカなら、愛する者とせめて自由になれましょう。私は友人のひとりに手紙を出したので、ル・アーヴル・ド・グラースまで行けば、多少の援助が得られるだろうと思います。ただ、そこへ行くまでが困ります。それに、せめてかわいそうなあの女に」と、彼は言って、自分の恋人を悲しそうにうちながめながら、「道中、何かしてやりたいのに、それも思うにまかせないのが残念です」

「それは、それはお気の毒な」と、私は言った。「そんならあなたのお困りをなくしてあげましょう。さあ、ここに少しばかりお金がありますが、どうかこれをお納めください。ほかのことでお役にたてないのが残念ですが」

私は彼に四ルイ（訳注　一ルイは二十四フランに当たる昔の金貨）の金貨を渡したが、看守たちには気付かれないようにした。なぜなら、もし彼らがこの金額を知ったなら、いよいよ自分たちの恩を高く売りつけることは分りきっていたからだった。そればかりか、私は看守たちと取り引きすることさえ思いつき、この恋の青年が、ル・アーヴルまで絶えず恋人と自由に話して行けるようにとりはからってやることにした。私は首領株を手招きして、これを提案してみた。彼はその厚顔無恥にも似ず、いかにも恥ずかしそうなようすをして見せた。

「わしどもにしたところで」と彼は当惑げに答えた。

「なにもあの娘と口をきいてはならんというわけではないんで。ただ、あの男はのべつ女のそばにいたがりますんで、これはわしどもにはじゃまになりまさあ。このじゃまになることに金を払うのはあたりまえのことに思いますが」

「それならばだね」と私は言った。「そのじゃまをじゃまだと思わずにすむには、あんたに何をやったらいいか考えてみよう」

彼はずうずうしくも二ルイを要求した。私は即座に与えた。

「しかし、注意しておくがね」と私は言った。「ずるいことしてはいかんよ。私はこの若い人に私の所書きを渡しておいて、連絡できるようにしておくからね。それに、ちょっと言っておくが、私にはあんたたちを処罰する権限がないわけではないんだよ」

私には金貨六ルイの出費だった。それにしても、この好意に対して、青年が私に示した激しい感謝の情を見れば、彼が私の恩恵をうけてもいいほどの人間であることを、私としても納得せずにはいられなかった。出発に先だって、私はその恋人にも言葉をかけた。彼女も私に答えたが、そのつつましい態度が、いかにも優しく、愛くるしいので、私は宿屋を出ながらも、女というものの不可解な性質について、いろいろと考えずにはいられなかった。

わが家にもどった私は、この事件のその後についてはなんら知るところがなかった。あれから、二年にちかい月日が流れた。その二年は、あの事件を完全に忘れさせていたのに、ひょっとした偶然から、私はその一部始終を知る機会にめぐまれたのであった。私は弟子の某侯爵とロンドンからカレーに来ていた。記憶に誤りがなければ、私たちは《金の獅子》という宿屋に泊まったが、ある事情で、その当日と、つぎの夜まで滞在していなければならなかった。午後、街を歩いていると、あのパシーで出会った青年らしい人を見かけた。ひどく身すぼらしい風体で、それに顔色もこの前よりは青かった。この町に着いたばかりらしく、古ぼけた旅行かばんをかかえていた。それにもかかわらず、あの立派な容貌が目だったので、容易に見誤るはずもなく、私はすぐに彼を思い出した。

「あの青年に言葉をかける必要があるんだがね」こう私は侯爵に言った。

今度はその青年のほうが私を思い出したときの、そ

の喜びようといったら、どう形容していいか分らないくらいだった。

「ああ！　あなたでしたか」彼は私の手に接吻しながら叫んだ。「あの死んでも忘れられないご恩のお礼をもう一度申し上げることができました」

私は彼がどこから来たのかたずねた。つい先だって、アメリカから帰って来たこと、そして、ここへは船でル・アーヴル・ド・グラースから着いたことを、彼は手短に答えた。

「お見うけしたところ、あまりお金もお持ちでないようですね」と私は言った。「なんなら、私の宿の《金の獅子》へいらっしゃい。私もすぐにもどりますから」

事実、私もすぐそのあとで戻った。彼のアメリカ旅行はどうだったか、その非運の顚末を一刻も早く知りたかったのだ。私は何かといたわってやり、宿にも命じて不自由のないようにさせた。彼は私から身のうえばなしをせがまれようなどとは考えていなかったのだ。

「あなたにはずいぶんご恩になったのですから」と彼は言った。「あなたに何かかくしだてでもしたら、いやしい忘恩として心がとがめます。何もかもお話ししましょう。自分の不幸や苦労のことばかりでなく、私のふしだらな行為も、私の一ばん恥ずかしい意志薄弱のこともお話しいたします。きっとあなたは私を非難しながらも、同情してくださらずにはいられないと思います」

私がここで読者に注意しておかなければならないのは、彼の物語を聞き終わって、すぐに筆をとったことである。その結果、この叙述ほど正確で忠実なものはほかにないと信じてよかろう。この年若い恋の冒険者が世にも優雅な語調で表現したところの、反省と情感の関係にいたるまで、私は忠実を期したつもりである。だから、ここにある彼の物語に、私は最後の一行まで、彼の口から出ない言葉は一言も加えないであろう。

私は十七歳で、哲学の学業を終了した。P……の土地でも名家の一族である両親が、私をアミアンに遊学させていたのだ。私は品行方正の、穏健な生徒だったので、先生がたは学校中の模範生におしたほどだった。それもこの名誉をうけるために格別の努力をした

というのではなく、ただ、生まれながらにおとなしい、物静かな気質をもっていたのだった。私は好んで学問にはげんだ。そして、もともと悪徳は大きらいだったので、何かにつけてそれが表に現われると、人びとはそれを私の美徳に数えあげるのだった。私の家柄、学業の優秀、それに、人好きのする容貌も手つだって、私は町の教養ある人びとから知られ、かつ、重んじられた。私は実に多方面の人びとの称賛のうちに公開の試験を難なく果たしたので、出席の司教などは、僧籍にはいることをすすめたくらいだった。両親たちの希望である十字軍隊などよりは、僧籍で名をあげるほうが間違いないと言ったのである。そのころすでに両親たちは、騎士グリュウの名で私を呼び、十字章をつけさせていたのだ。

休暇がきたので、私は父のもとに帰省する準備をしていた。父はすぐにも私を上の学校に入れてくれる約束だった。アミアンを去るにあたって私の最大の心残りは、つね日ごろ親しくしていたひとりの友人を残して行くことだった。友人は私よりいくらか年長だった。私たちはいっしょに教育をうけた。ただ、彼の家にはこれという財産もなかったので、僧侶になるよりほかはなかった。で、私の去った後もアミアンにとどまって、この職業に必要な勉強をすることになったのである。彼は多くのすぐれた性質をそなえた男だった。今後の私の物語で、そういう性質をあなたは彼のうちに認めることであろう。ことに友情に厚く、しかも、寛大である点は、むかしからの有名な例をもしのぐほどであった。あのとき、もし私が彼の忠告に従っていたなら、私は相かわらず聡明で幸福な人間であったろうに。少なくとも、私が色情のとりこになって、あの危険に引きずり込まれたとき、彼の助けを利用したならば、私は自分の幸運と名声の危険から、何かを救いだすことができたろうに。ところで、私の友がそうしたさまざまの心づかいから得たものといえば、そのせっかくの心づかいも無視され、また、それに腹を立てたり、それをうるさがったりするひとりの忘恩者によって、しばしば冷酷にむくいられるという、悲嘆よりほかはなかったのである。

私はアミアン出発の日時を決めていた。ああ！　なぜ私は一日前の日に決めなかったのだろう！　そしたら、私は自分の純潔をそっくりそのまま父のもとに持ちかえったろうに。この町を去ろうとしていた日のち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton